

漢詩作成偶感

三十代は住職もやる気に満ちていて、布教の勉強をはじめ茶道を習ったり、自転車で遍路を回る等、毎年何かしら新しい事に挑戦していました。漢詩もその中の一つで、部内の若手和尚と一緒に四年間程、安井草洲先生に就いて学びました。そのご縁で、昨年香川県で全日本漢詩大会が開催された際、誘われて久々に漢詩を投稿したのですが、今年も徳島で大会があるそうので、そちらの応募が三月一日からですので、目下、拙句を推敲中なので

すが。

しかしまあ、ずっと習い続けて来た訳ではないですが、私達禅僧の場合、正式な法要（お施餓鬼とか達磨忌等）で導師を勤める場合は、必ず七言絶句を作ってお供えするのが慣わしですし、お葬式の場合、七言絶句だけでなく、更に四六文と言われる対句で、引導を唱えるのが正式ですので、今随分と役に立っています。つくづく若い頃に勉強しておいて良かったと感じています。やはり何事も「一日にしては成らず」ですね。

實相寺花園會報

令和七年
二月一日発行
発行所
臨濟宗妙心寺派
陽明山 實相寺
實相寺花園會
〒761-0450
高松市三谷町
1811番地1
TEL.087-889-3838
編集発行人
山本文匡
<https://www.jissouji.net>

第190号

お寺の掲示板

「中国を訪問させてもらったことがある。どこへ行っても、毛沢東語録の一節が掲示されているが、よく見かけられる言葉は『滅私奉公』である。自分の事は抛^{なげ}つておいても、まず人に奉仕する。仏教の菩提心である。日本の戦時中の滅私奉公の焼き直しではあるまいか。日本の滅私奉公は、敗戦と同時に、跡形も無く消えてしまった。しかし日本でも、青少年は純心だった。真実お国のために生命を捧げたのである。」（文中要約のために中略済）

おどりへの道
さとりへの道
わかれ路にたち
よきみ弟子らは
さとりへの道の
しずけさにおれ

法句経七五

『法句経 真理のことば』 山田無文老師 春秋社

「父母恩重經を読んで①」

このお経に初めて出会ったのは、三十代半ばでした。当時はまだ子供達も幼く、忙しい日々を送っていましたので、若き日の両親がどんな風に自分達兄妹を育ててくれたかを思い出しつつ、子育てする若い親の立場で読みました。

それから三十年近くが経過し、子供達も巣立ちました。今度は、あらためて老親の立場でこのお経を読んでみたいと思います。

最近は平均寿命も延びた所為か、幾つになっても変わらないことが良いとされていますが、果たして本当にそれが幸せでしょうか。私は「老いては子に従え」の諺かあ

る様に、年齢に応じた生き方がある様に思えます。そのヒントが、このお経の中にあるのでは無いかと思うのです。

さてでは、先ずこの『父母恩重經』の概観をジェミニというグループのA-1に聞いてみましょう。

Q「父母恩重經とはどんなお経か」
A「父母恩重經とは、両親の深い恩を説いたお経です。正式には『仏説父母恩重難報經』といい、親が子を思う慈しみや、子が親から受ける恩の深さを説き、親に報いることの大切さを説いています。

父母恩重經の主な内容

親の深い慈しみ：親は子を産み育てるために、命がけの努力をし

ます。その慈しみは、たとえ言葉で表すことができないほど深いものです。

子の親への報い：子は、親から受けた恩に報いるために、孝行をするべきであると説かれています。孝行とは、親の願いを叶え、親を敬い、親の面倒を見ることです。

報恩の難しさ：親の恩は、たとえ一生をかけても報い尽くせないほど大きいものであると説かれています。

父母恩重經の特徴

偽経である可能性：父母恩重經は、仏教の經典として成立したのではなく、後世に作られた偽経であるという説が有力です。

儒教的な要素：父母恩重經には、儒教の孝の思想が強く反映されています。

様々な版本がある：父母恩重經には、様々な版本があり、内容も少しずつ異なります。」とこんな風に要点を教えてくれました。

確かにこのお経は七世紀に中国で作られた偽経なのですが、「その中心思想は『心地観經』や『孟蘭盆經』にあることは明らかです」と松原泰道師も仰っています。そこで次回からは松原師の『父母恩重經を読む』を参考にしながら、『大正新修大蔵經』に収録されている、敦煌本版の『父母恩重經』を読んでいきたいと思えます。